
観覧車の見える橋の上で

ナサチル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

観覧車の見える橋の上で

【Nコード】

N5186U

【作者名】

ナサチル

【あらすじ】

良く晴れた快晴の中。観覧車の見える橋の上。涼やかな水の音と共に、彼らは抱き合い結ばれた。そして、どしゃ振りの雨の中。観覧車の見える橋の上。傘も差さずたたずむ彼らは、荒む水の音と共に結びをほどいた……

良く晴れた快晴の中。観覧車の見える橋の上。涼やかな水の音と共に、彼らは抱き合い結ばれた。そして、どしゃ振りの雨の中。観覧車の見える橋の上。傘も差さずたたずむ彼らは、荒む水の音と共に結びをほどこいた……

そんな出来事から二年が経ち、彼らはもう、新たな人生に駒を進めていた。共に進むわけではない別々な人生。だが、人生とはどうも奇怪なもので、別々に進んでいるはずなのに、どうも駒同士が衝突してしまうことがある。それは、こうなるのが決まっていたのではないのかというくらい偶然的なことで、予期などできっこない。そういう衝突である。

舞台は変わってここは建築会社。そこで交わされる些細なトークである。

「おい優作！ 今度、合コンなんて開こうかと思ってるんだが、お前も参加するだろ？ お前、あまり女性絡みの噂聞かんからなあ。だからここは、キューピット様代わりに誘ってやろうではないかと思ってるな」

ガハハと笑いながら優作に近づき、背中をパンパン叩きながら上機嫌にそう言う。

これに対し優作は、面倒臭そうに苦笑いしながら言葉を返す。

「えっ……ええ。まあ、日と時間の都合が合えば構いませんけど」

「ん？ なんかつれんなあ。心配するな優作！ この俺がプロデュ

「スする合コンだぞ？ いい女だらけで万々歳だ。優作も俺の建築の腕を見ていたら、女の腕も凄まじいのではないかという期待がドンドン溢れ出てくるだろう!？」

「いやあ……言いたいことは分かりますが、話の論点そこじゃないですぜ先輩」

圧倒的な押し強さにたじろぐ優作ではあるが、このまま押しつぶされてはいけないと、とりあえず場を仕切り直し、自分の聞きたいことを答えてもらおうとする優作。だが、先輩は分かっているのかいのか、何故か自慢気な顔である。

「ガハハ！ まあ、そう言うな。いいか！ この合コンの意味とはなあ!……etc」

「ははは……」

やはり何も分かっていなかったようだ。もう、何度も聞いたよ。という話をマシンガンで繰り返して来る先輩にぐったりする優作。だが、ついに先輩が本題を話し始めた。

「それでだ。いつ開催するののだが、気になるか優作!？」

きた。ようやくきた。優作はなんだか涙がでそうになりながら大きく頷いた。別になんとも思っていないかった合コンが、なんだか凄く大事なことのように思える。いや、実際は、ようやくこの話が終わることなんだが、そんな思考すらも麻痺してしまいそうなくらいグッタリさせられたのだ。これを狙っていたとすると、とんでもない策士である。

「ガハハ！ ようやくこの合コンの素晴らしさが理解できたようだ。俺は嬉しいぞ優作！ そして喜べ優作！ 日時はなんとまだまだ猶予のある来週の日曜日だ！ これだけ時間があれば、ひ弱そうなお前でも、俺のような強そうでいかした男に変身できるだろう！俺のようにといい過ぎたか！ ガハハ！」

また、優作の背中をバンバン叩きながらベラベラと喋る先輩。よくもまあ、そんなにベラベラ言葉が出てくるなあと思いつつも、とりあえず思考を本題に戻した。

これも何かの縁なのか、日曜日の夜は丁度時間が空いており暇なのだ。まあ、確かに最近出会いという出会いもなかったし、これはいい機会だと自分に言い聞かせ、優作は先輩の誘いを承諾した。

「合コンか……」

その日の帰り道。優作はため息をつきながら、重い足取りで家路へ歩く。そもそも、何故出会いがなかったのかという面では、優作自身が出会いというものを避けていた面がある。優作は忘れきることが出来ていないのだ。二十歳の頃からの二年間。観覧車の見える橋の上で始まり、観覧車の見える橋の上で終わった二年間の恋を。今回の合コンだって、先輩の強烈な押しがなければ、きっと適当な言い訳をして断っていただろう。

「恭子今頃どうしてるかなあ……なんて、俺が心配することじゃねえよな……」

そんな言葉を一つ呟く程、優作は忘れきれていない。そして、こんな気持ちのまま合コンの日を迎える。

「おっ、きたか優作よ！ 後輩の癖に殿様集合とはなかなか見上げ

た根性だな！」

「す……すいません。でもまあ、時間には間に合ってるわけですし……ねっ？」

どうやらこの合コンの男側の人数は四人。しかも、みんなごつい。なんだかゴリラに囲まれた兎のような心境だ。そんな人達にジツと遅れたことに対し見つめられると、優作も苦笑いしながら適当な言い訳をしてたじろぐ。

「まあ、いいだろう。よし行くぞ野郎共！ いざ出陣！」

まあ、といつても厳しく問い詰めてくるわけでもなく、すぐに切り替えて進むところは、とてもいい人達だなあとか優作は思う。だがしかし、こんな状態の自分が合コンなんか行って迷惑にならないだろうか。そこはちょっと不安なところである。

「さあ、着いたぞ。覚悟を決める野郎共！」

何かのお祭りであるかのように男達の怒号が響き渡る。まあ、確かにお祭りのようなものではあるが。だが、そんな男達の怒号とは裏腹に、先輩にしては、なんか小奇麗そうな店選んだなあ。という意外性に驚く優作であった。

中に入ってもやはり小奇麗で、なんだか自然と今日来る女性陣がお嬢様な気がして、なんだか自分たちとは不釣り合いじゃないかなんて気分になる。

だが、女性陣の待つ部屋の戸を先輩が豪快に開けると、それはもう、つり合いとかそういう問題ではない事態に陥った。

「な……!!」

さっと先輩の後ろに隠れる優作。そして、ツンツンと先輩を指でつつく。

「ん？　なんだ優作？　まさかお前照れてるのか？　うぶなやつだなあ」

そんな先輩に対し、優作は首を振って違うというジェスチャーをした。どうすればこの事態を乗り切れるだろう。とりあえず優作は苦し紛れに腹が痛いポーズをとった。

「ガハハ！　なんだ。緊張しすぎて腹痛か。馬鹿な奴め。ほら、さつさとトイレに行つて来い！」

先輩の了承も得たことで、とりあえずは場の空気も乱さず、その場を離れることに成功する優作。だが、これからどうやってあの場へ帰ればいいのか。なんせ……

「な……　なんで恭子がこんなところに……」

優作は心臓が止まる思いで、思わずそう呟いた。まさか恭子がこんな合コンの場に来るとは夢にも思っていなかったのだ。

だが、久しぶりに肉眼で見た恭子は、少し垢ぬけているように感じた。少し無造作だった髪の毛もスラッと長く伸び、パツと見ただけだったが、化粧が上手くなったせいもあるのか、色っぽくなっていたように感じる。

なんとというか、トイレに来て少し冷静になって考えてみると、自分ではもう手に届かない存在になってしまっているような気がして

……

「何してんだろ俺……今更俺なんて眼中にねえんだろっし。というか覚えてるのか俺のこと……」

思わずそんな言葉を呟いてしまう。

「ああ……そろそろ戻ないとヤバいかな。そんな長々とトイレ入ってもおかしいしなあ」

少しずつ焦りはじめてくる優作。だが、言い訳も意味をもたなくなるであろう時間制限と、恭子に対する心情で心がパニックになり、むしろスッキリとしたというか、やけくそな感情が芽生え始め、一つの結論に至る。

「そうだ！ そうだよ！ ここで悩んでも何も始まらないんだ。なら、堂々と向かってやろうじゃねえか。どうせ覚えてやしないさ。もし覚えてても、気まずそうにして黙りあうだけ。ならまあ、ことも荒立たないはず……よし、行こう！」

トイレの中で決意を固めた優作は、トイレをでて、恭子のいる部屋の戸へ向かい、戸を開けようと手をかけたときは、流石に決意が揺らぎそうになるくらいに緊張した。だが、そんな緊張も押し殺し、優作は戸を開けた。

「遅れてすみません。一之瀬優作と申します。今日はよろしくお願
いします」

緊張もあつてか、戸を開けた途端にちょっと固めな自己紹介をしてしまった優作。これには、場の男女達もクスツと笑ってしまう。通常ならば掴みは大丈夫というところであろう。だが、優作は眼が

あつてしまった。全くクスリともせず、啞然とした顔でこちらを見る恭子と。

「ゆづ……さく……？」

(覚えていらっしやった。しかも、普通に声をかけて……)

優作はあまりの見当外れに動揺する。果たしてどうやって返事を返せばいいのか。これはもう固まってしまったと言う以外にない。するとすかさず先輩のツツコミが入る。

「なんだ優作。知り合いか？」

「えっ……ええっ、まあ」

なんて言えばいいか分からない優作は空返事しか返せない。これはもう何かあると、場の男女達は探り探りに質問を始めた。当初は空返事しか返していない二人であったが、徐々に冷静になってきたのか、やけくそになってきたのかは分からないが、質問に対してちゃんと答えるようになってきた。まあ、それも恭子だけであり、優作は相変わらずであったが。

結局のところ、ちゃんと明確な理由が恭子から全員に伝わった。

(そつだ。色つぼくなつたせいかな忘れてた。恭子は元々はつきりとした性格だったもんな)

トイレでの自分の決意はなんだつたんだろうと優作は頭を抱えた。

当然、場は合コンどころではなく、こんな偶然あるのだろうかと、

ざわざわし始める。

「ゴホン！」

そこに割って入るは先輩。一つ咳き込みをして、一度自分のほうへ皆を集中させる。

「静粛に静粛に！ 恭子さんの勇気ある言動のおかげで、事の理由が分かった。これはもう、偶然という言葉では言い表せない奇跡である。とするならばどうするか。二人きりになるよう送り出してあげようではないか。その後、二人がどうなったかは一切干渉せず、ただ黙って送り出してやるのが大人として最善の行為だと考えるのだがどうだろうか？」

当然、これに反対する意見はない。というかさっきまで馬鹿キヤラだった人間が急にまともになったことに場は啞然としている。

「うむ。結論はでたな。さあ、両名気は使わず行きなさい」

先輩がそつと二人の肩に手を添え、ポンツと押し出す。二人も一度顔を見合わせて意思を確認し、合コンの場を後にした。

ちなみにこの後、見事なギャップを見せつけた先輩がモテモテだったことは言うまでもない。

さて、言われるがままに店を出た二人。だが、正直どうすればいいかわからない兩名。特に優作は明らかに動揺しているのが見え見えで、なんとも頼りない。

まあ、別れて二年経つての偶然の再会なのだから、むしろギクシヤクするのは当たり前前の光景なのであるが、なんにせよ行動に移さなければ何も始まらない。だが、どうにもこうにも上手くはいかないのだ。二人はただ無言で歩き続ける。

「……………」

「……………あつ」

ギクシヤクしながら歩く中、いきなり小さく声をだす恭子。いきなりだったもんだから動揺はしたものの、このチャンスを逃すべからずと考え、すかさず「どうしたの？」と言葉を返す優作。ようやく一回目の言葉のキャッチボールが成立した。

「ここ、覚えてる？」

恭子が優作を見ながら指さす。

「あつ。ここ！懐かしいな」

恭子が指さした場所は、いわゆるぬいぐるみなどを多く取り扱う店であり、優作と恭子の初デートの場所でもある。

「懐かしいね。あのときの優作は笑えたなあ」

二年ぶりに優作に対して見せた笑顔。色っぽくなくても相変わらず愛嬌のある笑顔。これには優作も何か込み上げてくるものがあった。

「うつ……うつせえ！ あんときや俺なりに焦ったんだよ！」

そして、こういうときこそ強がってしまう。男の宿命である。

そんな優作を見てまたウフフと笑う恭子。このやり取りには二年前の自分たちを思い出してしまう。

（畜生。やっぱり可愛いや。でも、俺たちはもう終わってるんだもんなあ……）

思わず溜め息を漏らす優作。

「あつ、溜め息！ どした優作。もしかして……私といるのしんどい？」

聞きにくいところをズバズバと聞いてくる。ここもやっぱり全く変わっていない。しかも、とても真っ直ぐな瞳で。こんな風に聞かれて、もし、本当にしんどいと思っけていても、言えないだろうなあと考える優作である。

「そうじゃないよ。というか相変わらず手厳しいねちみは」

「ふふ。相変わらずの恭子ちゃんですよ〜だ！」

しんどくないというのが伝わると、嬉しそうにあっかんべーをしてくる恭子。これには優作も少し和む。

(いつもそうだ。男なものにはつきりきれない俺をいつも明るく引っ張って……)

「なあ。恭子って今は何をしてるんだ？」

このまま恭子に気を使わせ続けていてはならないと話を振る優作。

「えっとねえ。まあ、下手で悪いんだけど、華のOLさん」

「自分で華のとか言っちゃってやんの。楽しいの？」

「そうでもないかなあ。やっぱり大変よ社会人は。学生時代カムバツクって感じ」

優作も徐々に気が和らいできたのもあって、ようやく言葉の連携がとれてきた。他愛もない話を繰り返す優作。明らかに他愛もない話であったが、優作にとつてすればとても素敵な時間であった。

ちなみに、恭子は現在フリーとのことである。

「あっ！ ねえ優作。時間時間！」

しかし、素敵な時間はいつか終わりを告げられるものである。焦る恭子に釣られて、何故か優作も焦り気味に時計を確認する。

「げっ！ もう終電じゃないか！」

そう。終電が迫っているのである。

「もう、いい大人なのに終電の時間に気づかないなんて面白いね」

どうやら恭子はこの状況を楽しんでいるようだった。
だが、このセリフは優作にとっては色々と考えさせられる結果になっただけらしい。

（なんだ？ どういうことだ？ これは終電過ぎても構わないということなのか？ つまり……さそ……誘って……いやいや、そんなはずはない。というか恭子はそんな女じゃない！）

「飛び去れ雑念煩念！」

「えっ？ いきなりどした優作」

恭子の言葉でハッと我にかえる優作。ごまかしの意味も込めて、駅の方角を指さす優作。

「のんびり会話してる場合じゃないぜ。駅まで走るぞ」

「ちょ……いきなり走らなくても。というかレディーにスピード合わせなさいよ！」

いきなり走りだす優作に戸惑いながら、後を追いかける恭子。走ってる間、息を切らしながらぶつくさ言い合っていた二人であったが、それはもう傍から見てもどこか楽しそうな光景だったことは言うまでもない。

そして場面は変わって駅の切符売り場。別れの時である。

そしてここにきて優作は気づく。このまま別れてしまっただけはもう連絡がとれない。

今知っている恭子の番号だつてもう二年前のものだから繋がると思えない。番号を聞かなければ。

「あつ……恭子……」

「ん？ どうしたの優作？」

声をかけ、番号を聞こうとする優作。だが、こんなときに、優作の優柔不断な性格が邪魔をする。

自分は期待しすぎではないのか。そんながつついてしまったら恭子の人生の邪魔になるのではないか。色々なマイナスが頭に浮かぶ。

「いや……早く切符買わないと電車でちやうぞ」

そんなことを考えてしまつては、もう聞くに聞けない。でも、そんな気持ちを見透かしたように、恭子は動いてくれる。

「だね。でも、その前に」

何やら紙とペンを取り出し、さらさらと何かを書く。そして、その紙を優作に手渡そうと、紙を優作の前へ差し出す。

「はい！ 私の電話番号。暇なときにでもかけてきてあげてよ」

唖然としながらも我にかえる優作。いつも自分の不安を埋めてくれる。そんな恭子に感謝の気持ちを心で唱えながら、差し出された紙を受け取る優作。しかし……

「ありがとう。でも、今は携帯電話も進化して赤外線って武器があるんだぜ？ 紙とはまた古風だなあおい」

こういつときこそ強がってしまう。やはり男の宿命である。そして、そういう返しが分かっていたかのように、にやにやしなから人差し指を横に揺らし、口で「チツチツチ」といいながら反論の意を唱える恭子。

「確かに、君の意見も分かるよワトソン君」

「誰がワトソン君だ」

お決まりのお約束をかます二人。

「うふふ。でも、真面目な話、手渡しの方がロマンチックでよくない？ 古風もまた一興だと思っの」

「いやまあ、俺もそうは思っ……って、早く切符買わなきゃ！ 時間時間！」

優作の一声で今度は恭子が時計を見る。すると、もう急がないと間に合わないではないか。これには恭子も大慌て。どうやらさつき終電の状況を楽しんでいたのは、ただ時間にまだ余裕があったかららしい。

「じゃあ、またね！ 絶対連絡してよ！」

「ああ！ じゃあまた！」

大慌てで切符を買い、大慌てで解散する二人。後々考えると、なんだかこんな光景も懐かしく、だけどなんだか新鮮な、なんともいえない心情に駆られた優作であった。

恭子との再会から数日が過ぎた。今頃、恭子から受け取った電話番号の書かれた紙を使い、恭子と電話をしているのかと思いきや、まだ一度も電話をかけていない優作。

優作は、まだ迷っていたのだ。確かに恭子と居る時間はとても楽しく、電話だって本音を言えばすぐにでもしたいところであった。だが、優作と恭子は一度終わった関係。これ以上踏み込むと、恭子にとってとても迷惑になってしまうのではないか。一度終わったのだから、いさぎよく去るべきではないのか。どうしてもそういう意識が心に見え隠れしてしまう。

「はあ」

職場でも思わず溜め息をついてしまう優作。これには、事情を知る職場の友人達も相談に乗ってあげたいと思うのではあるが、合コンで先輩が、二人のことに対する干渉はしないでおこうと宣言したという話は職場全体に伝わっており、聞くに聞けない状態なのであった。

だが、ここに一人、我慢の限界に近い男がいた。

「むうー。せつかく俺がかっこよく送り出してやったというのに、何故優作は浮かない顔なのだ！ 本当ならもっとうざったらしい幸せオーラを放っているのが普通のはずだ。これは間違いない何かあつたに違いない。話を聞きたい。聞いてやりたい。だが……」

いくら先輩といえど、自分から言い出した手前、いつものノリで聞きに行くのも流石に行きづらい。

いつも、話を聞こうか迷いに迷うもののそれは切り出せなかった。

そんな調子のまま数日が過ぎる。数日たっても、いつもと同じようにウジウジしている優作。正直もう、みんな我慢の限界だった。ここまでウジウジされると、自分に関係ないことといえどイライラする。仕事にも支障がでる。これはもう、干渉とかそういう問題ではない。自分たちに危害が発生しているのだから。

だが、みんな我慢の限界を迎えようとする中で、既に限界を迎えつつあった先輩が我慢できるはずなかった。荒々しく優作の下へ駆け寄る先輩。これには会社の仲間達も、「ようやくあいつが動いた！」と、心の中でガッツポーズした。いまや、言いだしっぺの癖になんて思う仲間はいない。

「優作！ 今日ちょっと俺の家に来い！ これは先輩命令だからな。絶対に来るんだぞ！」

いきなりそう告げられた優作は、ビクツとなりながら返事を返す。

「えっ。先輩そんないきなり。って、ちょっと、先輩！」

優作はいきなり告げられたことよりもさらに驚いた。

なんと、先輩はそれ以上何も言わず優作の下から去ってしまったのだ。これには優作は啞然とする。

「おいおい……先輩の家知らねえよ俺……」

これは先輩らしいミスである。優作が自分の家を知らないということ計算に入れておかなかったのだ。

そして仕事が終わりに、いよいよ先輩の家へ行くことに。

家を知らなかった優作は、まず先輩の家を聞きださなければならぬ。恐らく先輩に聞きに行っても、意味の分からぬ理由で教えてはくれないだろうとふんでいた。他の同僚に聞き、わざわざ自分で地図を作り、先輩の家へ向かう。

先輩の家へ向かう途中、色々な思考が頭の中をめぐった。話される内容は分かっていた。きつと、恭子とのことだろう。そりゃ、こんなウジウジした自分を見ていけば、何か言いたくもなる。それも分かっていた。そして、こうやって動いてくれた先輩に深く感謝している。だが……

「物凄いマシンガントークで説教されるんだろうなあ……先輩らしい持論を並べて……」

そう考えると、嬉しいものの少し苦笑いになる。

そして、そんなこんな考えている内に、先輩の家へと辿り着いた。先輩の家のチャイムを鳴らす優作。落ち着かない様子で先輩が現れるのを待つ。

「……遅いなあ……」

なんと言うか、家から生活臭はするのだが、中々姿をあらわさない先輩。

なので、もう一度チャイムを鳴らそうとしたその時、急に家からドタバタとした音が聞こえた。これに驚いた優作は、反射的にチャイムから手を離す。

すると、勢いよくドアを開け、先輩が現れる。

「すまん！ 少し手間取ってしまったな。待たせてしまったな！」

「えっ……ええ。それはいいんですけど、それはどういう意味合いですか先輩……？」

優作はブツと吹き出しそうになる気持をこらえ、そう言った。

それもそのはず。何故か先輩は和服を着ているのだ。あの先輩が和服で登場。これだけで優作からすれば笑えてしまう。家ではいつも和服なのだろうかとか想像すると更に。

「ん？ この和服変か？」

「いえ、変ではないですが、なんで和服なんだろうなと思って」

「おいおい。今日俺は真剣な話をしようとお前を呼んだのだぞ。真剣な話には和服。日本男児の粹というものだろう」

真顔でそう答える先輩。そう。先輩は今日、真剣な話をしようと呼んでくれたのだ。ここで和んでいる場合ではない。優作もキュッと顔を引き締める。

「さて、ここで立ち話してるのもあれだろう。中へ入ってとりあえず茶でも飲もうではないか」

「はい……」

いよいよ先輩の家の中へと入る優作。とりあえず、先輩の家の第一印象は、先輩の家は以外にも片付いているというものだった。先輩は案外、繊細で几帳面なのかもしれないと感じた。

とりあえず、先輩が出してくれたお茶を飲み、喉を潤す。その後、少し沈黙する両者。

そして、先輩が重い口を開く。

「さて優作。俺が何故お前を家に呼んだか分かるな？」

「はい……恭子とのことですよね」

「ああそつだ。分かつてるなら話は早い。俺は、お前たちを送り出してやった後のことについて何も知らない。干渉はしないと宣言したからだ。それと同時に、上手くやっっているだろうと願っていた。だがどうだ？ 最近のお前はうわの空で寂しい眼をしている。一体何があつたのだ？ 自分の話せる範囲までいい。聞かせてくれ」

話の始めから、単刀直入に聞きたいことを全てストレートに聞く先輩。

しかし、ここまでできて話さないわけにはいかない。優作は自分の気持ちを全て伝えるような感情で、先輩の質問に答える。

「何があつた……か。正直、何もないんです。いや、自分で言っちゃうと滑稽になっちゃうんですが、あの日は上手くいったと思います」

ここまで言葉を発し、一度言葉を止める優作。恐らくここで話に割って入るだろうと予想して言葉を止めたのだ。だが、この言葉に対し何も言わず静の姿勢をとる先輩。この先輩の行動に驚きはしたが、表情にはださない。

しばらくして、また口を開く優作。

「でも怖いんです。先輩も知ってるでしょうけど、俺と恭子は二年

前まで付き合ってた。そしてあの日偶然再会した。めちゃくちゃ驚きましたよ。心臓の音が身体全体に聞こえるくらいに。そして先輩達の優しさで二人きりになって久しぶりに喋って……時間を忘れるくらい楽しかった。でも、楽しかったからこそ怖い」

「恭子さんとの再会が楽しかったのは十分伝わった。だが、何故怖いのかがよくわからんな。再会して、時間を忘れるくらい楽しくて普通ならまた会おうとなり、幸せ一本釣り状態になっているはずだ。なのに、何がそんなに怖いのだ？」

先輩には分からなかった。優作は何故そこまで怖がっているのだろう。確かに優作は、男なのに奥手でウジウジしてどこか女々しいのは先輩もよく知る話。だが、まさかここまでとは思っていなかった。

「先輩は……再会するということについてどう思います？」

急な優作からの質問。質問を質問で返されるとは思っていなかった先輩は少し動揺する。

だが、悩みを聞く側として精一杯答えてやらなければならない。

「再会か。俺はそういう経験がないからなんとも言えんな。だが、それはチャンスでもあるがアクシデントでもあるだろうな。再会出来て良いこともあるが、面倒なこともあるだろう。だが、それが悩みでもあるまい。面倒な部分が多いから悩んでますなんてくだらん理由を言わん男だと言うくらいにはお前を理解しているつもりだぞ優作」

「そうなんです。チャンスでもありアクシデントでもある。そして俺からすればチャンスです。正直、再会して喋って分かりました。」

やっぱり俺は恭子の事が好きです」

「なら、悩む必要などないのではないのか？」

「……いえ、だからこそ悩むんです。俺はチャンスだと思っている。でも、恭子はどうなんだろうと。俺のこの身勝手な気持ちで恭子を振りまわしていいのかなって。俺、一度振られてますからね。また、恭子の重荷になってるかもしれないって思うと動けなくて……でも、動きたいからどうしていいか分からなくて……こうして悩んでるってわけです」

かなりくどくなつたが、優作は言いたいことを先輩に打ち明けることが出来た。

これに対し先輩は、少し間をおいた後、注いであつたお茶を全て喉に流し込み、言葉を発する。

「優作が恭子さんを気遣つて引こうか押し通そうか迷つて動けないでいることは分かつた。それは確かに悩むだろう。だが、悩むなら動いてからにすればどうだ？ ここで優作が引いたところで、それはお前の中にある虚像の恭子さんから身を引いたに過ぎないのだぞ」

先輩の言葉を黙つて聞く優作。少しずつ優作は先輩に突き動かされつつあつた。

だが、まだモヤモヤした悩みから解放されたわけではなく、先輩には申し訳ないが、返事出来ない状態にある。

「これは俺の持論なのだが、俺は男は馬鹿でいいと思つている。常に馬鹿馬鹿しい戯言を考え、常に現実味のない理想を唱え、常に自分を突き通す我が儘な心を持つ。男なんてそんなもんでいい。だってそうだろう。女は凄いいぞ。そんな馬鹿な男の戯言を。理想を。我

が儘を。女は笑顔で包容してくれるんだ。だからだ優作。まだ悩むときじゃない。お前はもう少し馬鹿になるべきだ。『男は死ぬその時まで馬鹿であれ』だぞ優作」

『男は死ぬその時まで馬鹿であれ』この言葉は優作を突き動かすには十分な言葉であった。

なんだか、心にかかっていた鎖から解放され、なんだか身体まで軽くなったのではないかという錯覚にまで陥った。それくらい、先輩の言葉は温かく、心に響いた。

優作の心情の変化が表情にまでも現れたのか、先輩の顔もどこか安堵に満ちた顔となる。

「俺……今から恭子に電話します。それで、自分の気持ちそっくりそのまま。馬鹿我が儘に伝えてきます」

優作が久しぶりに笑顔を見せた。これには先輩も笑顔になる。

「おお。それがいい。ナイスな判断だぞ優作」

笑って優作を送り出す先輩。このとき優作は、先輩が頼りになる父親に見えてしまったという。

「先輩。俺の為なんかこんな話し合いの場まで設けていただいて……ありがとうございますと言葉しか言えませんが、本当にありがとうございました」

キチツと先輩にお礼を言う優作。

「優作の為か……それは間違いではないが、それだけではないのだぞ！ これは俺の為でもあるのだ。どういふことか分かるか優作！

「？」

急にテンションを上げてくる先輩。さっきまでのシリアスとは打って変わって、身振り手振りを使って言葉を表現してくる。

だが、優作も正直、先輩が自分の為だけにこのようなことをしてくれるとは思っていなかった。だからずっと頭の片隅に置いておいた仮説があるのだ。だが、あまりそれは考えたくなかったので考えなかったこと。

「まさか……」

「ああ……そのまさかだぞ優作！俺はあの合コンで恭子さんを狙っていたのだ！だが、まさかこういういきさつがあるなんて……仕方ない。ここは優作に託そうと思った矢先のこのウジウジだ！我慢できるはずなかるう！」

優作の仮説は当たった。そして、こういう偶然もあるものなのだなと自然と苦笑いになった。

「でも、なら多分このままほっとけば俺と恭子は自然消滅して先輩にチャンスが巡ったかもしれないよ」

「なっ！！そうか……そういう考え方もあったか……気づいてはいなかったが、これぞまさに敵に塩を送るという例だな！」

「その塩のお陰で本当に助かりました。現代の上杉謙信ですよ本当では、本当にありがとうございます謙信公」

「おっ！優作からそういう冗談が聞けるとは中々余裕出てきたな。『男は死ぬその時まで馬鹿であれ』だぞ信玄公！」

こうして先輩によって突き動かされた優作。夜も更け、常識的に考えると電話をするにも時間的にギリギリな時間。先輩の家を後にして、早速自分の携帯を取り出し、一文字一文字心をこめてゆっくりと番号を押す。そして電話をかけ、コールの音が鳴った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5186u/>

観覧車の見える橋の上で

2011年10月9日08時10分発行